

両ダンゴのチョーチン釣り

- オールマイティーに使える万能タイプ
天々400cc+ガッテン400cc+
バラケマツハ200cc+水200cc



●作り方

ネバリの出る素材が多くブレンドされているので、水を注いでからは手を熊手型にして大きくかき混ぜるが、15～20回位の回数でOK。使用するときには約半分を小分けにして押し練りを加えれば深いタナまで持つエサになる。

●特徴

エサ持ちのよい「天々」と「ガッテン」をベースにし、「バラケマツハ」でボソッ気を出すブレンド。上層からエサをバラけさせるが芯残りはよく、手水を打っていくことで近年最も魚が強い反応を示す“しっとりネバ系”のエサができる。そのため、このエサが効く範囲は広く、様々な場面で使用することができる。

●使い方のコツと手直し

このエサを硬さで持たす場合には、「バラケマツハ」の量を調整すれば簡単に強いボソエサができる。逆にヤワネバにする時には「バラケマツハ」の代わりに「黒べら」、「軽麩」、「浅ダナー一本」のいずれかをブレンドするとさらにしっとりネバが強くなる。



●強く開くボンタイプ

天々400cc+GTS400cc+ スーパーダンゴ200cc+水200cc



+



+



+



●作り方

粉の段階で良く混ぜ合わせて水を注ぎ、手を熊手型にして大きくかき混ぜる。下から上に混ぜるときにはエサボールを傾かせるとスムーズにできる。ボンッとできあがるので、約半分を小分けにして使用する。

●特徴

ネバリのでる素材は「天々」だけだが、「GTS」は練りを加えることでネバリが出る。タナに入るまで糸を引くように強くエサをバラケさせて“寄せて釣る”パターンのエサ。そのため、エサ付けもやや大きくラフにハリ付けすると落下途中からバラけるので集魚性もすこぶる高くなる。

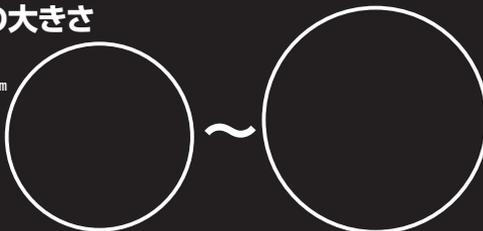
●使い方のコツと手直し

上記のブレンドで作る手順を変えるだけで若干持ちのよいエサに変えることができる。天々400cc+GTS400ccを混ぜ合わせ、ここで水200ccを入れて指先にネバリを感じるくらい（回数にして30～40回ほど）まで混ぜ合わせる。そして最後にスーパーダンゴを200cc入れたら練るのではなく全体に混ぜ合わせるように仕上げると、芯残りするダンゴができる。

●エサの大きさ

実寸大

直径2.5～3cm



寄せながら釣るのが基本なので、エサ付けはややラフ気味で、チモトを押さえることで、ハリ残りさせる。受けや止めがありながらつかえつつなじむのがよく、上層での寄りがきつく、なじみが悪いときは、表面を転がすようにして丁寧に付け、バラけすぎないようにする。

●まとまりのよいヤワネタイプ

天々400cc+
パウダーベイトヘラ400cc+
水250cc+ガッテン200cc+
バラケマツハ200cc



+



+



+



+



●作り方

「天々」と「パウダーベイトヘラ」を混ぜ合わせてから水を入れ、いったんヤワ練りに仕上げる。数分後に「ガッテン」と「バラケマツハ」を入れて、エサがまとまるまでかき混ぜる。このエサの場合はボツには仕上がらないので、まとまりの良いダンゴになる。

●特徴

「天々」、「パウダーベイトヘラ」、「ガッテン」というネバりの出る素材が多くブレンドされているのでまとまりがよく、ボンタッチには仕上がらない。時合によりどうしてもボツが効かないときにはこのような“ネバったエサ”のほうが魚も落ち着き、釣りやすくなる。

●使い方のコツと手直し

このヤワ練りでエサ持ちが悪い場合には、水を入れる前に「粘力」をスプーン2～3杯入れ、エサの膨らみとバラケ性を調整する。また、深いタナを狙う場合には重さが必要になるので「ガッテン」を「グルバラ」に替えると重さがつく。



●釣り方のコツ

チョーチン釣りの場合、ハリスの倒れ込み（ハリスが張るまでの間）でどれだけ魚にアピールできるかがポイントになる。そのため、エサ付けは基本的には大きめに、上からバラけさせる釣り方になる。しかし、その日の場合で攻め方も異なるので、①エサをラフにして落下中から強くバラけさせる。②エサの表面だけにネバリをつけ、タナに入ってから大きくバラけさせる。③パターンを試してみると正解が見つけやすい。



エサは基本的には「ボン」に仕上げ、小分けにしながら調整するが、エサのサイズが大きいので、はじめに作る量もある程度多く作ったほうが手直ししやすい。アタリの取り方は、①肩で受けてのアタリ ②なじみ込み時のアタリ ③深くなじんでからのアタリ ④ウキが返されてからのアタリ

この4つに大別できる。時合いを作りながら確実に釣り込むには③と④が適しており、釣果も安定する。

■基本セッティング

竿●8~21尺
(その日のタナに合わせる)

ウキ●8尺=羽根寸8~10cm、15尺=羽根寸11~12cm、21尺=羽根寸13~15cm、パイプトップorムクトップ

ミチイト●0.8~1.0号

盛期でもあり魚の活性も高いので、タックルトラブルを防ぐことが大切になる。ミチイトは1.0号と太めにして、フロコ系も適している。ハリスの長さや段差はその日の状況によっても異なるが、短めよりも長めでアピールを強めたほうが釣りやすい。ハリは大きめのエサを若干ラフに付けるので7~8号を基本にする。小バリでエサを持たせようとすると無理にエサを練るようになり、カラツンも多くなる。

ハリス●0.4~0.5号
上55~70cm、
下70~90cm

ハリ●6~9号

●オモリ 実寸大

1g

+

17×15mm

8尺●絡み止めタングステンオモリ1g+0.25mm厚板オモリ17mm×15mm

1g

+

17×25mm

15尺●絡み止めタングステンオモリ1g+0.25mm厚板オモリ17mm×2.5mm

1g

+

17×35mm

21尺●絡み止めタングステンオモリ1g+0.25mm厚板オモリ17mm×35mm

ここがポイント1 Q&A

サワリがあるのになかなか食いアタリが出ないとき

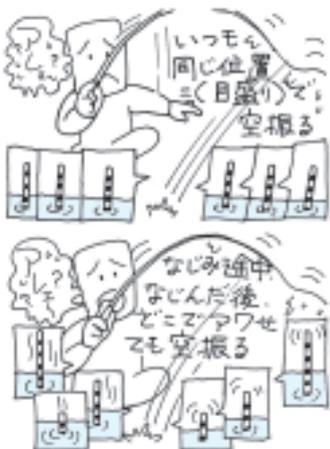
まず、エサが確実に持っているか確認が必要です。まれに、深いタナを釣っている場合、エサ落ちのバランスが狂っていることもあります。ムクトップ仕様のウキなどは注意が必要です。次にエサがバラケ過ぎていて、そのためウズリが激しく、食いアタリにならないこともあります。ですが、盛期は寄り過ぎるぐらいのほうに追い食いすることも多いです。ですから、エサを練ってバラケ過ぎに対処するときは、エサ全体に練りを入れるのではなく、必ず小分けにして調整します。

その他で考えられることは、①ハリが小さい。②小べらが多くエサを吸いきれない。③ハリスの段差幅が狭い、なども関係してきますが、一番は「エサがしっかりとタナまで持っているか」をチェックすることです。



ここがポイント2 Q&A

アタリがあるのに釣れないとき



この場合はエサの持ち過ぎを考えます。一定の位置（目盛）で毎回のように空振って釣れないのか、それともなじむ前でも後でも釣れないのかで対処法は異なります。

前者の場合はエサが大きくて持ち過ぎている場合が多いです。使っているエサに手水を打って柔らかくし、バラけるエサを差し込みます。これでバラケ性が高まり吸い込みやすいエサになります。また、エサが持ち過ぎている場合、エサのタッチは変えないでハリスを延ばして、途中での受けを強くすることで対処できることもあります。

後者の場合はまず一定のなじみ幅が出るようにエサ付けやタッチを変えます。つまり、魚のタナが広がっているのでそれを凝縮していきます。アタリを取る位置もこのようにときには注意して常に深い位置で取るようにします。その繰り返しでタナも安定していきます。